

體明徴の叫びが出たのである。

今となつては否應なしに「ウヘツフミ」を繙かねばならなくなつた。

此「ウヘツフミ」は主として神代文字の古文献に據つたもので、語部の暗記を主としたものとは違ふばかりでなく、古事記の方は支那文化中毒者と僧侶の手に懸つて勝手に書き直された形跡があるが、「ウヘツフミ」の方は阿片や抹香の臭氣は微塵もない純日本式のものであるから有難い。

それに第一に萬世一系が徹底的に鮮明であり清澄であるから、少しの不安なしに讀まれるのである。

唯残念な事は、其一部が缺損して居ることであるが、多分何者かの毒手にかゝつたものであらう。

兎に角、此「ウヘツフミ」が祭政一致の詔勅と同時に再び出現したといふことは天の攝理と申すべく、感謝措く能はざる次第である。

そこで此「ウヘツフミ」が、外道學者が抹殺して居るやうに果して偽物でありインチキ物であるか無いかを明かにすることが、之を刊行した余の責任である。

但し我田引水の議論は無用であるから、言挙げする必要のない事實を以てするより外には無い。故に余は「ウヘツフミ」の記録が果して事實に合致するや否やを慥かむるために、惡戦苦闘をつゞけたのである。

「ウヘツフミ」は四十冊に餘る本であるから、一度之を通讀するだけでも容易なことではない。然るに吉良義風翁の努力に由つて、「上記鈔譯」と題する三卷の物が明治十年に刊行されたのであつたが、無論絶版であるから今では其残本を探し出す外に途はない。ヨシ探し出したとしても容易に買ひうるものとは思はれな

し。  
併し時勢は「ウヘツフミ」の出現を要求して止まない。故に余は先づ機關雜誌「神祕之日本」の附録として順次之を發表するつもりで、昭和十二年十月發行の第

十四號から收載し始め、第二十四號で漸く完了した。

尙ほ「神祕之日本」の讀者に非ざる一般人の便宜上、余は此附録を前後兩篇に裝幀して別に刊行し已に完了したのである。

されば「神祕之日本」の附録を読んだ同志も、亦別に「上記鈔譯」を購求された士女も、之を机上に披いて余の述べんとすることの眞偽を判定さるゝ自由を得たわけである。従つて余の責任が益々重大を加へて來ることは已に覺悟して居る。

讀者已に知らるゝ如く、余は日本天皇の世界君臨に對する準備のために、一切を捧げて居る身であるから研究も調査も趣好や道樂のためではない。而して過去四十餘年間、全く人の足跡を印せざる深山大澤曠野のみ跋涉し四十餘回死の川を渡つたのも之がためであつた。

已に述べた如く、記紀には大缺陷があつて神武紀元にまで溯ることさへ不可能

になつて居る。そして神武以前の奥に進むことは勿論不可能である。

然るに之に反して「上記鈔譯」を繙くと、恰も汽車の旅行案内でも見るやうに一目瞭然で、日本の汽車ほど正確なものは何處の國にも無い、日本の汽車に乗つて居れば時計は要らぬと、外人は異口同音にいつて居るが、「ウヘツファミ」を讀むと亦同様の感を起すのである。

讀者の前には「上記鈔譯」が開かれてあるが、之を「神祕之日本」の附録にしたのは昭和十二年の十月であつたことを先づ記憶されたい。

次に神祕金屬「鍬」の記事を出したのは同年の六月であつたことを記憶されたい。

此「鍬」は元來流星から隕下したものであるから、必ずしも日本にしか無いものとはいはぬ。併し我日本には神代當時から有つたばかりでなく、之を「ヒヒイロカネ」と呼んで居つたほどであるから實用化されたことが想像される。そして

鏡といふ字は「ヒヒイロカネ」に對して支那人が作つた當字で日比金の義であるが、支那には其實物が有つたわけではない。

然るに「ウヘツフミ」の原書を見ると、カカコノ山から「ヒヒイロカネ」を探りて劍及鏡を作るといふ記事があるので、此鏡の實物を手に入れる事は出来ぬまでも實見したいものと焦心して居つた。ところが不思議にも五貫目大の物が突然見知らぬ人に由りて我家に持ち込まれたのである。

余は更にカカコノ山が何所にあるかを探したくなつた。が空しく數年を過ごした。

ところが「上記鈔譯」を附録に出し始めた其月に、何人の紹介状もなく一奇人が來訪した。來るや否や先生の探して居るカカコノ山は我郷里に在るから御案内したいといふ。奇人ではあるが狂人ではない。然れば「ヒヒイロカネ」は有るかと反問して實物を示すと、甚だ簡単に之なら澤山落ちて居る。大きいのは八尺位

のものもあるといふ。余は之を聞いて奇人が少し行き過ぎたのではないかと、一寸半狂人かとも思つたが、ダン／＼聞き質すと狂人らしくもなく、而も素性は道長公の後裔だといふので容貌は決して平凡ではない。

余は「ヒヒイロカネ」を少くも五六個蒐集したかつたのと、カカコノ山を探し當てたい切望から、此奇人に欺されてもいゝと氣が進んで行く事を約束した。

双方の都合を數へて居るうちに雪が降り初めたので、已むを得ず延期となり、昭和十三年四月に決行したことは已に當時「神祕之日本」誌に詳述した通りである。

成るほど豫想以上の神祕境であつた。そしてカカコノ山に案内されて行つたが案内者は此邊らしいといふだけで、ドノ山であるか分らぬ。それなら鏡が何處にあるかと聞いても實は案内者も「ヒヒイロカネ」といふものを見たことが無かつたので、八尺大の物といふたのは唯の石であつたから、丸で狐に騙されたやうな

ものである。

併し余に取りては少しも騙されたとは思はず、花咲爺の犬を思ひ出すのである。広島でピラミッドを發見した時もそうであつた。ツマリ或場所まで余は案内されたのである。鍬が有るか無いかは自分で探せばいいのだと氣が附くと、附近一帯を探したが一つも見當らない。併し無いやうな氣がしない。

案内の三人と隈なく探したが見當らないので、其日は一先づ歸ることにした。歸途藤原家の舊墓地内を通つた時に、余は圖らずも五十匁ほどの物を一つ發見した。次いで又一个、それから往來で二百匁ほどの大物を三個見附けたが、案内者も一個を見附けた。

騙したのではない。亦騙されたのでもない。

そして世界に一つしかないと思ふた鍬が兎に角四個まで探されたとすれば、モット數多くあるべき筈だ。カカコノ山は必ず此附近に相違ないと斷定されて元氣

百倍したが、それは此次に譲ることにした。

六月再び出張した。そして全く奇蹟的に或河の中で、約二百個十匁ほどの大收獲をしたが、別働隊は山中深くに入り込んでこれ亦同様の大收獲をしたばかりでなく、此二個所から推して行つてカカコノ山の全體の見當が附いたのである。

余は「ウヘツフミ」の原書の方は全部二度も通讀して居つたから、「上記鈔譯」の方は別に讀む必要はないと思ひ、附録にする分だけ其都度毎月複寫して居つたのである。

そして右の第二回調査から歸つてから、「上記鈔譯」の刊行を思ひ立つたために急に残りの全部を複寫する必要に迫られた。そして最後に不思議なる記事に眼も心も奪はれたのである。

讀者は此處で「上記鈔譯」の最後の一行を讀まれない。實に最後の一行、それは左の如くである。

陸中國令明玉弦命参朝シテ管内ノ海邊鐵玉多ク出ツ (以下欠文)

嗚呼不可思議千萬、併し事實である。

上記鈔譯が発刊されたのは明治十年である。余は昭和四年に此の貴重な秘史の存在を知り、購求の如きは絶対に望み得ぬとしても、せめて一讀だけでもと冀ひつゝ、其搜索に努力したのであつたが、之れ亦不思議な道が開かれて、上記も上記鈔譯も我掌中に藏めらるゝことになつた。

而して此上記鈔譯が後世の偽作であるか無いか、此最後の一行で解決されたのである。實に最後の一行である。

此原文と照合すると、吉良義風翁の譯文には誤りが無いことが明かである。

此一行は、當時の奥羽奉行ともいふべき明玉弦命が、遙々上京参朝して、管内状況を奏上した時の一節であつてモ少し詳しく述べると、我管内金銀寶石を産し海邊より鐵玉多く出づとて、勿論夫々の實物を献上されたことは言ふまでもな

5。

アア

○ 中シ多クマ、由カモチモチコ  
 ○ 回ゾホカヤシルル いミナミコ  
 ○ 幸リ上ネココ里タ里タヘレ  
 ○ へハシママ四ケ多  
 ○ 里タ里タユルル へ  
 ○ マママ回ツ 多  
 ○ イイイイヘノミヨト へ  
 ○ コウダクテテ 生  
 ママラマ  
 ツベトヲヲ  
 ナナナコウ  
 ララ多クナ  
 シクコシ  
 ○ ミコ業ゲ

此〇系原書虫喰ミテ字義難解

ウ エ ロ フ ミ ヨ ヲ ヱ ヒ ツ ノ ヲ ツ 幸 リ ヲ ア

此版は余の見發傳へ聞かれ別府の志岡本哲人氏が此事實の裏書を一層強化するにためると、原書に、復寫寄贈され、茲に誌上同氏の御厚志を載せ、讀者共と感謝の意を表す。

而も此時の天皇は神武天皇に在らせられるから、東征されなければ領土が無いやうな従來の文書とは異り、皇土到るところ皇恩に照明されて居つた事が分る。尤も之れには鐵玉とあるから、余は原書を読んで居つた時に砂鐵の大なるものか或は隕鐵位に思ふて居つたのであるから問題にはならなかつた。

然るに奇人石川日出麿氏（假名）の來訪で、余は偶然此地方に赴き、而も其處で「ヒヒイロカネ」を發見したのである。そしてマダ何の氣もなく此最後の一行まで書き寫し終つた時に、此鐵玉とあるのは「ヒヒイロカネ」であることに氣が附いたのである。

すると此神祕金屬「ヒヒイロカネ」は神武天皇の天覽にも奉供されたとすれば其實物が奈良縣附近何處にか現存して居るべき筈であるから此探求も面白い。

此地方は今では海岸から三里餘も離れて居るが、神武天皇當時には海岸であつたことは誰にでも分るから、鐵玉とあるのは鐵ではなく「ヒヒイロカネ」であつ

たことは明かで、今でも「ヒヒイロカネ」を知らぬ人が見れば鐵としか思はれないのである。

のみならず此地方には隕鐵も珍らしくない。併し隕鐵は錆びて居るが「ヒヒイロカネ」は決して錆びない。又隕鐵は磁石を引くが「ヒヒイロカネ」は引きもするし、亦弾じきもするから直ぐに見分けがつく。

又神武天皇に献上されたものは隕鐵ではなかつたかといふ疑問も出やうが、赤く錆びた石では一寸献上する氣になれず、又隕鐵となると何十貫何百貫と大きな物があつても小さなものは見當らない。それでは献上に不便である。併し「ヒヒイロカネ」は一匁二匁の小さなものもあり、五六貫のものもあり、其以上のものもあるが、一個一個が自然の礫状をなし、少しも酸化せず光つて居るから、普通の鐵でなく、珍らしき鐵といふので献上されたものであらう。

そこで世界の學者が何といはうと「ヒヒイロカネ」即ち鍬の實在を否認するわ

けには行かぬ。又鏡については從來の學問では何をも説いてないから、鏡に非ずと打消すことも出来ず、亦鏡なりと肯定も出来ないのである。イヤ鏡といふ物を見るさへ始めてゐあらう。無論「ヒヒイロカネ」に到つては初耳であらう。

此神祕な金屬が鐵玉として上記の最後の一行に明記され、剩さへ神武天皇に献上されてあるではないか。

さらば、知ると識らざるとを問はず「ヒヒイロカネ」の實在は是認の外なく、亦之に關する記事も事實となつて来る。

而も余が「ヒヒイロカネ」を發見したのは此記録を見てから探しに行つたのではなく、此記録を讀んだ時は鐵玉を「ヒヒイロカネ」とは思ふわけがなく、又石川氏に案内されて行つたところが、マサカ此記録にある場所とは氣が附く筈もなく、「ヒヒイロカネ」を探し當て、後、此上記鈔譯を複寫して此一行にある鐵玉は「ヒヒイロカネ」なることに氣が附いたのであるから唯不思議といはざるを得な

50

此謎の金屬「ヒヒイロカネ」が全世界に唯一箇では説明しやうもないが、已に數百個を探し當てたので、諸學校の標本にもなりうることとなり、同時に話題にも上れば質問も出て来るから、之に對する説明が必要になつて来るので、外に行くところがなく上記鈔譯を繕かねばならなくなつて来る。

斯くて今迄全く行き詰つて居つた、日本國史の研究は一新生面を開くわけで、一步一段恰も神殿への階段を昇るやうに、此上記鈔譯を逆に讀み上ると、記紀を讀むやうな不安が少しもなく足を踏みしめて進みうるのである。

然り、花咲爺の話が事實化されたやうに神祕的に「ヒヒイロカネ」が數多く發見されて、上記鈔譯の最後の一行が事實なりと斷定された以上、一を聞いて十を識る人は全部を事實なりと確信しうるのであるが、兎に角漠として稽ふべからずであつた、神武以前の國史の最後の二頁を手にすることが出来たのであるから、

此後は一段一段と順に階段を昇りさへすれば、自然に天御中主尊の御代まで參拜が出来るので、國體は自づから言擧げすることなく明徴されるのである。

嗚呼、二千六百年間不通であつた神武以前への參拜道路は之れで開通したのである。

されば今日、國體明徴の最善策は、各學校に上記鈔譯と鏡の標本とを備附けることであると余は明言して憚らない。

之れで始めて我等は、阿片や抹香の臭氣が少しも鼻につかない清淨々の松風に袖を拂はれながら神武の御代にまで安着し得たのである。そして之れで始めて日本に來たやうな氣がするのである。

とはいへ差當り神武の御代だけを残る限なく參拜したい。

今や橿原神宮の神域は擴大せられ、又改善せられつゝある。されば同時に記紀に録された神代の御代でなく、上記鈔譯に録された神武天皇を仰ぎ奉りて、全世

界の神域たらしめることは、天孫民族としての我等の使命であることを忘れてはならぬ。

尙ほ余は、此上記鈔譯中の主なる記録を實地調査して、神武以前幾萬年に亘る神代日本の文明を中外に説示する考であるが、必要な費用に乏しく自由に活動し得られないのが残念である。

出來れば此際、日本天皇の世界君臨に對する運動同志各位が、上記鈔譯及鏡を夫々關係の學校に寄贈さるゝことになる、一方に運動費も出來、又他方直接新日本啓發にもなるから、二重三重の奉仕が出来ることになるが、何れ近々振天動地の新事實が現はれることを期待する。



讀  
後  
感

一一一

讀  
後  
感

一一〇

讀後感



